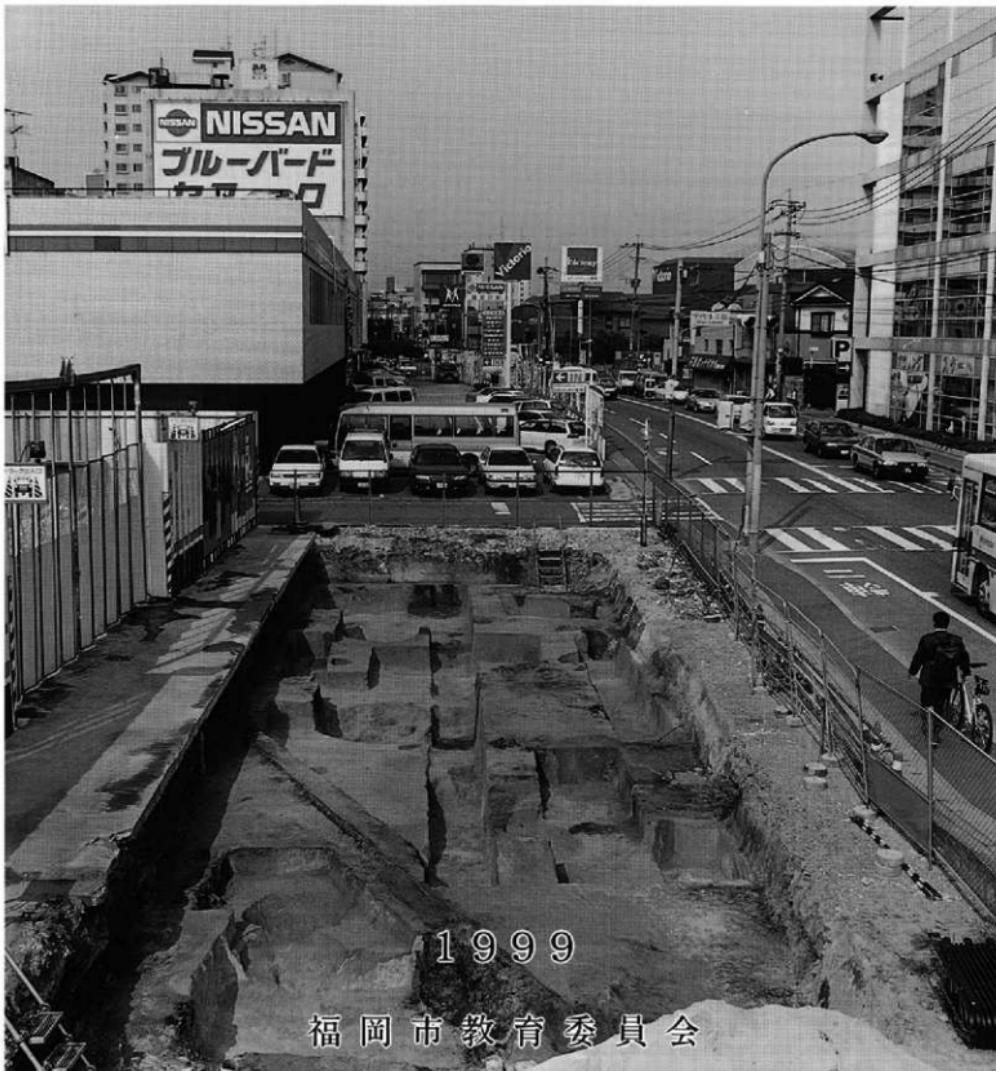


堅粕3

—堅粕遺跡群第8次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第590集



1999

福岡市教育委員会

序

玄海灘に面し、「活力あるアジアの拠点都市」を目指す福岡市には、豊かな自然と歴史が残されており、これを後世に伝えていくことは、現代に生きる私たちの重要な務めであります。福岡市教育委員会では、近年の開発事業によって失われていく埋蔵文化財について、事前調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。

本報告書に収録した堅柏遺跡群第8次調査は、都心部と郊外とを結ぶ交通の利便性を高めるために計画された、都市計画道路千代柏屋線の拡幅に伴うもので、多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が、文化財保護への理解と認識を高める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。また、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、堅柏遺跡群第8次調査（福岡市博多区千代1丁目）の概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本書に使用した造構実測図は、大庭・大濱菜穂が作成し、折茂由利が淨書した。
4. 本書の造構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本書に使用した造物実測図は、大庭康時・佐藤信が作成し、上塘貴代子・折茂由利が淨書した。
6. 造構写真・遺物写真是、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7. 遺物・記録類の整理には、今井民代・岡山良子・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・大庭智子があたった。
8. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

1996年10月28日付けで、福岡市上木局街路課より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区千代一丁目地内に関する埋蔵文化財事前審査願いが提出された。同地は、西部ガス株式会社福岡支店の敷地であったが、社屋の移転にともない、その大部分は福岡県職員福利厚生施設建設用地、国道201号線に面した部分は道路の拡幅用地とされた。国道201号線は、福岡市の都心部と東南方向の郊外、さらには筑豊地方を結ぶ幹線としてほぼ慢性的な渋滞に悩まされており、その全面的な拡幅は県民の課題と言える。この拡幅事業は、都市計画道路千代柏原線道路整備事業として計画され、用地買収の終了した部分から順次着工されている。

今回申請のあった地点は、堅柏遺跡群第3次調査地点とは国道201号線をはさんだほぼ向かいにあたり、背後の県職員福利厚生施設用地では、福岡県教育委員会によって第7次調査が実施されており、埋蔵文化財の遺存が予想された。そこで、事前審査願いを受理した埋蔵文化財課では、11月28日に試掘調査を実施、搅乱が著しいもののその間際を縫うように遺構が遺存していることを確認、12月5日付け文書をもって発掘調査が必要である旨を回答した。

その後、発掘調査を前提に条件整備等の協議が進み、新年度の4月早々から発掘調査に着手する事で合意を見た。1997年4月7日には現場で最終的な打ち合わせと、仮事務所の設置を行い、翌8日より表上掘削を開始、堅柏遺跡群第8次調査に着手した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査主体	福岡市教育委員会		教育長	町田 美俊
調査総括	同 埋蔵文化財課		課長	荒巻 輝勝（前任）
	同		第二係長	山口 譲治
調査庶務	同		第一係	河野 淳美（前任）
調査担当	同		第二係	大庭 康時
調査補助	大濱菜緒			
調査作業	石川君子 井口正愛 岩隈史朗 江越初代 大久保五枝 大久保学 大庭智子 折茂山利 河野恒子 清水明 杉山正孝 関加代子 曾根崎昭子 都野浩之 永隈和代 長田嘉造 能丸勢津子 野口ミヨ 早川浩 宮崎タマ子 村崎祐子 占田清			

遺跡調査番号	9706		遺跡略号	KKS-8	
調査地地番	博多区千代1丁目地内		分布地図番号	吉塚35	
開発面積	2220m ²	調査対象面積	800m ²	調査実施面積	542.04m ²
調査期間	1997年4月7日～1997年5月30日				

3. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野の海岸部は、博多湾岸に形成された数列の砂丘によって何重にも縁取られている。これらの砂丘上には、弥生時代以来生活の営みがみられ、多くの遺跡が残されている。著名なものを西から掲げると、三角縁神獣鏡を副葬した方形周溝墓が見つかった藤崎遺跡、弥生時代終末期から古墳時代初期の式標遺跡である西新町遺跡、中世都市として著名で弥生時代から現存まで途切れることのない複合遺跡である博多遺跡群、中世博多と並んで町が出来、箱崎宮の門前町でもあった箱崎遺跡群などがある。

堅粕遺跡群は、西には博多遺跡群に接し、東は吉塚本町遺跡群をはさんで箱崎遺跡群へとつなぐ。現在は、博多遺跡群との間は石堂川で隔てられているが、石堂川は戦国時代の開削と伝えられ、また地形の起伏をトレースしても、博多遺跡群の基盤となる砂丘列の内、南側の列とつながっていることがうかがわれる。したがって、博多遺跡群の南側砂丘から堅粕遺跡群・吉塚本町遺跡群は、同じ砂丘上に乗った遺跡群と考えることができよう。

堅粕遺跡群では、これまでに6次の発掘調査が実施してきた。その概要は次の通りである。

(1) 第1次調査

1988年7月11日から7月28日まで、博多区千代一丁目地内において調査が実施された。調査面積は、360m²である。遺構の遺存状態は悪かったが、弥生時代後期の土坑が検出されている。包含層付近の搅乱坑除去中、「貨泉」破片1が出土した。

(2) 第2次調査（かつて、吉塚本町遺跡との間で調査次数の混乱があった為、欠番）

(3) 第3次調査

1990年1月25日から2月7日まで、博多区千代2丁目292外において実施した調査である。565m²を調査した。既存の建物の基礎による搅乱が激しかったが、古墳時代前期の方形周溝墓2基（1号墳・2号墳）、土坑7基、溝1条、奈良時代の土坑1基、近世の溝1条を検出している。（福岡市調査年報Vol.4 1991年）

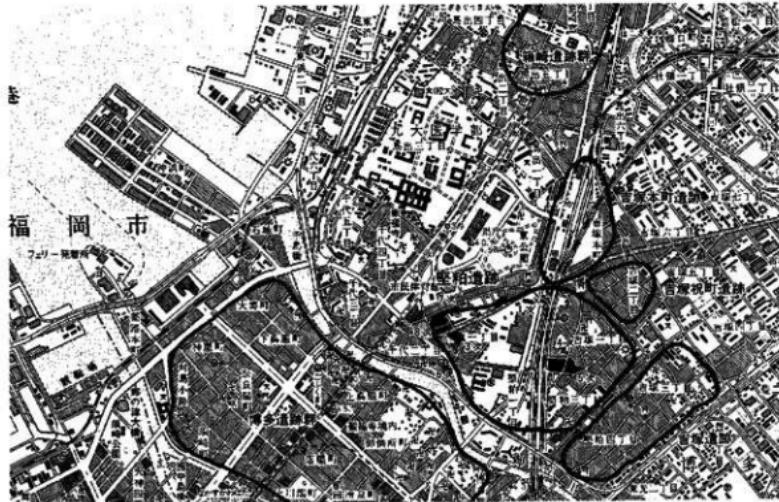


Fig. 1 堅粕遺跡調査地点位置図 (1/25,000)

(4)第4次調査

1990年5月14日から6月30日まで、博多区吉塚1丁目1番外において実施した。調査面積は845m²である。本調査地点は、戦後に市営住宅が建設されるまでは西林寺の墓所であったと言われ、近世・近代の搅乱によって遺構はあらされていた。

奈良～平安時代の土坑74基、竪穴状土坑2基、井戸2基、江戸時代の井戸、近代の土坑などである。コンテナ14箱分の遺物が出土した。 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第274集 堅粕1 1992年)

(5)第5次調査

1990年12月19日より1991年3月30日まで、博多区吉塚1丁目568-2外において実施した。前述した第4次調査地点の東に隣接する。調査面積は、1600m²である。

古墳時代後期の土壙墓1基、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡1軒、土坑64基、上塙墓1基、木棺墓1基、溝6条、柱穴、近代の井戸、近・現代の墓塚などを検出した。

特筆すべき遺物として、越州窯系青磁・絵物陶器、墨書き土器等が出土しており、一般集落とは異なる公的な施設の存在が推定されている。 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第274集 堅粕1 1992年)

(6)第6次調査

1994年6月1日より6月29日まで、博多区千代二丁目163他において調査を実施した。調査面積は、444.5m²である。

近・現代の搅乱が著しく、十分な成果を上げられなかったが、弥生時代の谷状地形、時期不明の土坑・柱穴などを検出した。 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第405集 堅粕2 1995年)

(7)第7次調査

福岡県教育委員会が実施した調査で、1995年9月18日から12月12日にかけて、2084m²を発掘調査している。既設建物による搅乱が激しいが、古墳時代前期を中心とする土坑・井戸などの遺構・遺物が出土した。飯唄塚・土塹などの出土が注目される。 (福岡県文化財調査報告書第130集 1997年)

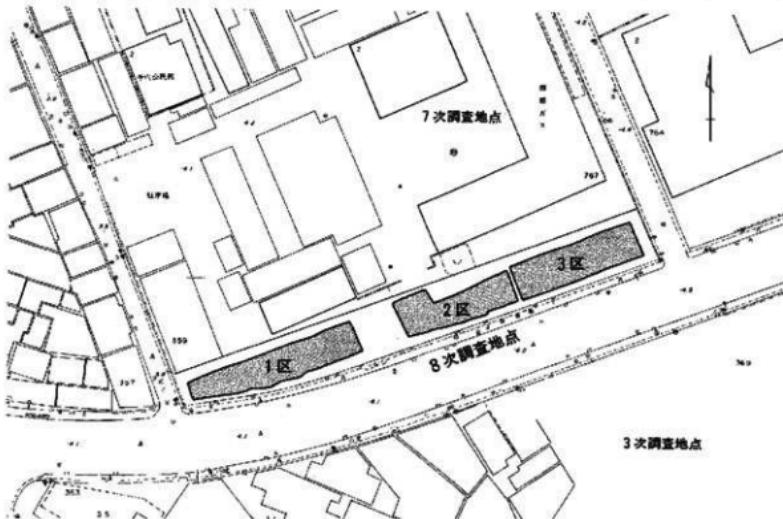


Fig. 2 堅粕遺跡第8次調査地点位置図 (1/1,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法

今回の発掘調査の全期間を通じて、調査地点の背後では、福岡県職員厚生施設の建設工事が行われていた。そのため、工事用出入口を閉鎖する訳には行かず、調査区を分割せざるを得なかった。工事用出入口は二ヶ所あり、交互に一ヶ所ずつを生かす形で調査を進めることとなった。また、掘削に伴う残土は搬出できなかつたため残土置き場も確保しなくてはならず、調査事務所も調査対象地内で移転する必要が生じた。結局、調査範囲を西から1区・2区・3区と三分し、1区の調査時には2区を残土置き場として3区に事務所を置き、2区を調査する際には1区に残土を、3区を調査する時には2区に残土を置き1区に事務所を移して発掘調査を実施した。

調査区は、ほぼ全面に搅乱がみられ、地表のかなりの部分が薄く簡易舗装されていた。そのため、表上掘削にはバックホーを用い、その段階でできるだけ搅乱埋設物も除去した。また、バックホーでは除去できないコンクリートの中地染とガス管については、その除去を断念し掘り残した。そのため、特に1区に置いて「H」字型に未掘部分が生じた。また、1区と2区の間が大きくあいているのは、コンクリートのベタ基礎が厚く打たれていたことによる。

1区・2区では、造構検出面である地山砂丘面までバックホーで掘削し、造構検出・精査を行った。しかし、3区においては造構が不明瞭で検出が困難であった。よって、調査区の長軸方向に平行して三列の断続するトレッジを設け、造構の有無を確認、造構が確認された部分については、グリッドを設定して検出可能なレベルまで掘り下げ、精査を行った。

実測に際しては、調査区が狭長で分散せざるを得なかつたため、各調査区ごとに基準点を設け、それぞれに作図、各基準点についてはこれを座標に読み込むことで全体図を作成した。

2. 基本層序

Fig.12に示した63号造構の土層図を参照していただきながら、基本層序の説明をする。地表面は、場所によって違いはあるが、コンクリート舗装またはアスファルトの簡易舗装がなされている。これら舗装の直下には、厚さ20センチ前後でパラスが散かれている。パラスの下は、ガラを多く含む黒色土(搅乱)、黒褐色砂質土、黄褐色砂、灰白色砂(地山)となる。黄褐色砂は、比較的しりとり器を包含した砂層で、ほぼ調査区全体を覆っているが、そのまま造構埋土につながっている部分もあり、両者を識別することは出来なかつた。地山砂は、粒径がやや粗く、河川の生成物と思われる。

3. 発掘調査の概要

1区は、今回の調査対象地で最も西側の調査区である。210.36m²を調査した。西端近くで比較的造構が遺存していた。地山の標高は、西端で2.93m、東端近くで2.5mと東に向かって緩く傾斜している。1区では前節で述べた黄褐色砂層は薄く西側ではほとんど見られなかつたが、これは地山の傾斜に対応したものといえよう。

2区では、145.46m²を調査した。搅乱が激しく、その合間に底から造構を検出した。地山標高は最

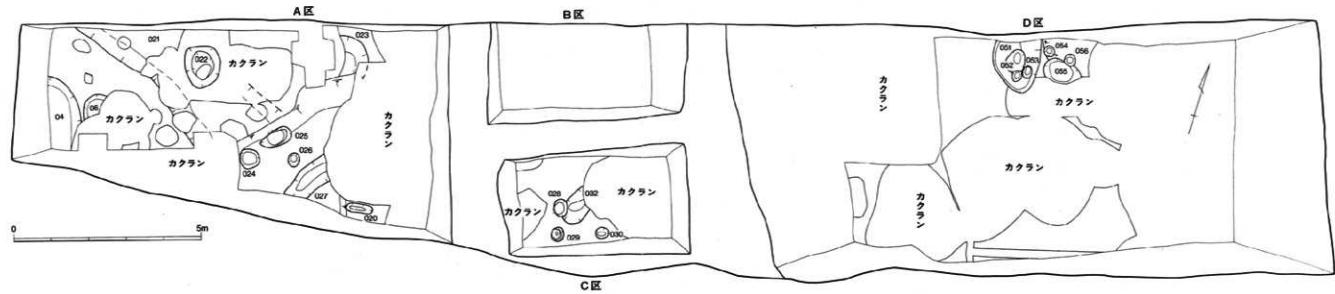


Fig. 3 1区造構全体図 (1/100)



Ph. 1 1区全景（東より）



Ph. 2 1A区全景（東より）



Ph. 3 2区全景（東より）

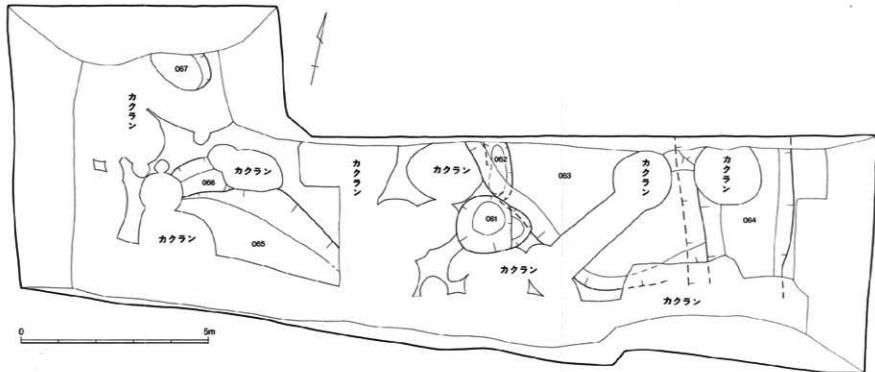


Fig. 4 2区造構全体図 (1/100)



Ph. 4 3区全景（西より）

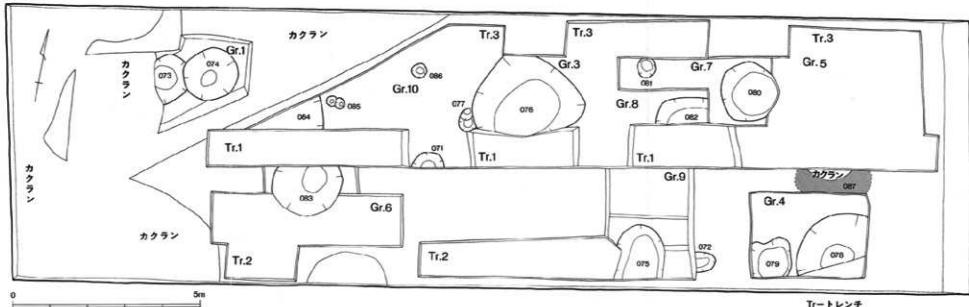


Fig. 5 3区造構全体図 (1/100)

も多いところで2.8mをはかる。

3区は厚いコンクリート舗装に覆われていたため、コンクリートカッターで切断し調査に入った。調査面積は、186.21m²をはかる。前述したように造構が極めて見難く、トレンチを多用して調査をおこなった。東端の砂層中から土師器がまとまって出土したが、掘り方は確認できなかった。

各区から検出した造構は、溝・柱穴・土坑で、おおむね古墳時代前期に属すると思われるが、土器の小片が出土したのみの造構が多く、時期の決め難い造構も少なくない。

4. 造構と遺物

次に、比較的まとまった遺物が出土した造構、あるいは出土遺物から時期が推定できる造構について、その概要を報告する。

21号造構

1区の西端近くで検出した溝状造構である。検出面上での幅210センチ、深さ13センチ前後をはかる。底面の標高には若干上下があるが、搅乱による遺存状態の劣悪さに起因するものであり、溝底全体が確認できた部分は調査区北壁面付近のごく一部にとどまる。検出部分の延長が短いため確実ではないが、軸線はおおむねN-62°-Wを採る。

出土遺物の内、実測に耐えたものをFig.6に示す。1~3は、古式土師器である。1は、高壺である。赤茶色を呈し、搬入系土器と考えられる。内面は平滑な撫でもしくは箒磨きである。外面の調整痕跡は、器壁があれでいて見えない。2~3

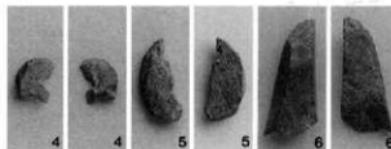


Fig. 5 21号造構出土遺物



Fig. 6 21号造構（東より）

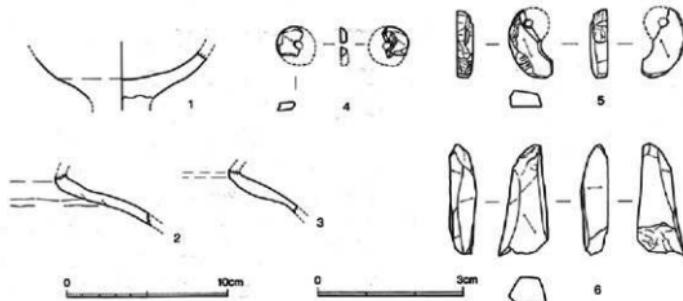


Fig. 6 21号造構出土遺物実測図 (1/3, 1/1)

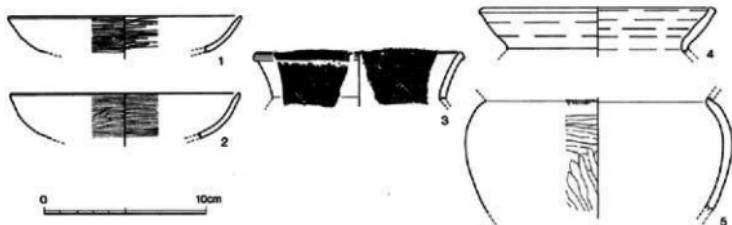


Fig. 7 27号造構出土遺物実測図 (1/3)

は、甕である。外面は刷毛目調整、頸部の内面は撫で調整する。4～6は、滑石製の未製品である。4は小玉、5は勾玉、6は不明である。

古墳時代前期の溝状造構である。

27号造構

1区から検出した溝状造構である。攪乱坑の下から検出したもので、本来の形状は、不明である。調査時点では、幅60センチ前後、深さ25センチほどである。

古式土師器が出土した。Fig.7-1・2は、椀である。内外面ともに、密に範磨きする。3は、甕である。口縁部外面には粘土紐を貼り付け、肥厚させる。内外面とも、粗い刷毛目が残る。4は、布留式系の甕である。5は、壺である。外面は範磨き、内面は横位の平滑な撫で調整を行う。外面の頸部には、わずかに刷毛目が残る。

古墳時代前期の造構だが、21号造構には後出するものと思われる。

61号造構

2区の中程から検出した土坑である。東側は造構の切り合いであり、61号造構が新しい。

古式土師器、瓶壺壺、土錐が出土した。Fig.9-1・2は、椀

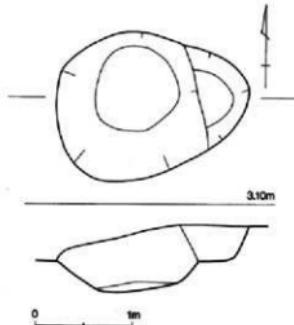


Fig. 8 61号造構実測図 (1/50)



Ph. 7 61号造構土層断面 (南より)



Ph. 8 61号造構 (南より)

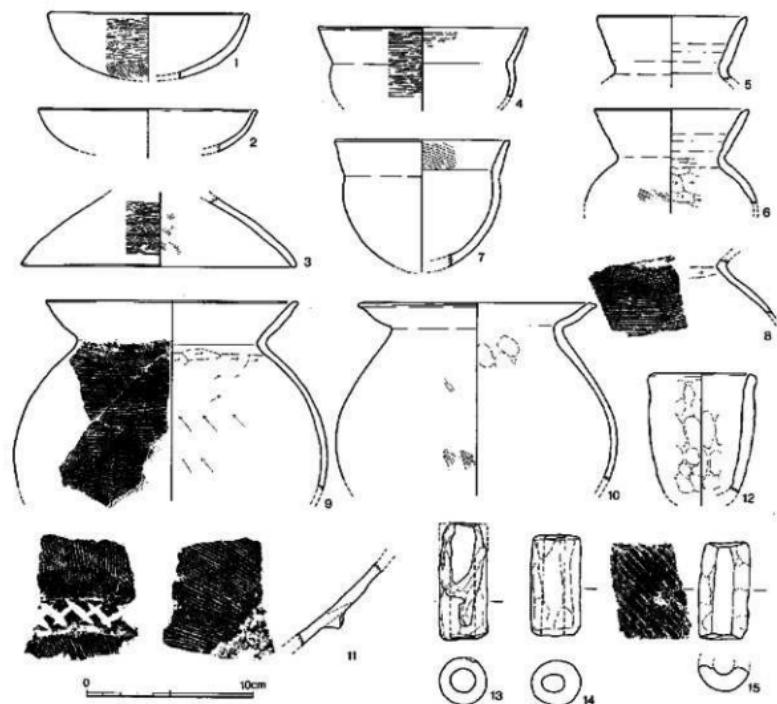


Fig. 9 61号遺構出土遺物実測図 (1/3)

である。2の内面は、平滑な撫で調整である。3は、高环の脚部であろう。4～7は、壺である。7は、鉢とするべきかもしれない。体部内面は平滑に撫で調整、外側も撫で調整する。8・9は、庄内式系の壺であろう。体部外表面は目の細かい平行叩き、内面は範削りする。9の胸部中程には、さらに刷毛目を重ねている。10は、布留式系の壺である。11は、大型壺の脚部破片である。13～15は、上鍤である。13・14は指押さえ・指撫でで成形するが、15には平行叩き痕もしくは板目痕が認められる。

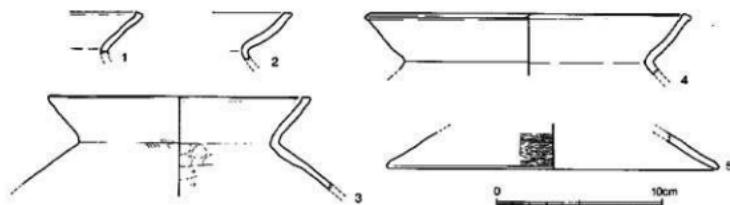


Fig.10 62号遺構出土遺物実測図 (1/3)

62号造構

2区で検出した土坑である。次に述べる63号造構の西隣の埋土を切り込んで、掘り込まれている。幅70センチ、長さ160センチ、深さ47センチで、長梢円形を呈する。

若干の土師器が出土しており、実測可能なものについてFig.10に示す。1～4は、布留式系の甌である。口縁部は横撫で、体部外面は刷毛目、内面は頸部付近で指押さえ、体部で範削りする。5は、高坏の脚部であろう。内外面ともに範磨きするが、内面では単位が捉え難い。

古墳時代前期に属するが、切り合い関係から63号造構よりは後出する。

63号造構

2区の東半部で検出した溝状の造構である。土

層図に示したように埋土の大部分が黄褐色砂であり、造構検出、特に次に述べる64号造構のような他の造構との切り合いを判別することは困難であった。そこで、全体をA～Eに分けて調査した。この内、A・B・Eが63号造構にあたる。

擾乱の間から検出してるので、あまり確実とは言えないが、「く」字型に屈曲する溝の角部分を調査したものと思われる。溝の幅は推定で330センチ、深さは土層壁面で70センチをはかる。なお、土層壁の観察から、64号造構に切られているものと知れる。

出土遺物は多く、主として黄褐色砂層に含まれていた。Fig.13-1～Fig.15-38は、土師器である。1～3は、碗である。1の外表面は指押さえと撫で、内面は平滑に撫でる。器肉は厚めで、淡褐色を呈する。2・3は、薄手で

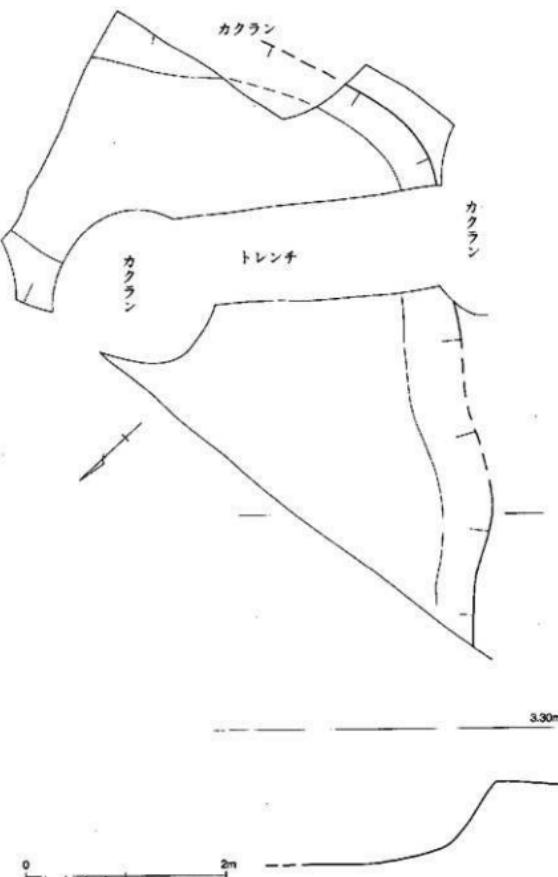
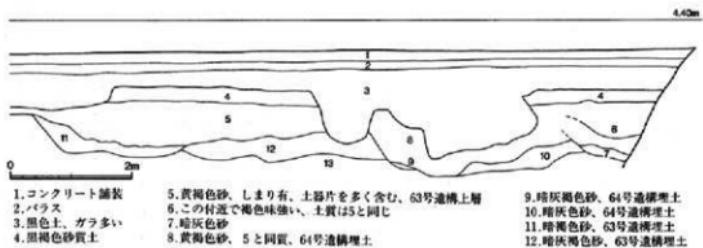


Fig.11 63号造構実測図 (1/50)



Ph.9 63号造構 (北東より)



Ph.10 63号造構土層断面 (南より)

赤褐色を呈する。2は、外面笠磨きで内面平滑撫で、3は内外面とも笠磨きするが、外面の中程には下地の刷毛目が残っている。

4～8は、小型の鉢である。4は、内外面とも撫で調整で、平滑さをかく。外底部は、笠削りする。器肉は厚く、淡褐色を呈する。5～8は、比較的きめ細かく良質な胎土で、赤褐色を呈する。いずれも、外面は密に笠磨きする。

9～11は、器台である。胎土は良好で、赤褐色。皿部分は、いずれも笠磨きする。脚は多様な調整が採られており、10は内外面ともに刷毛目調整、11は、外面は密に笠磨き、内面はその上位で刷毛目、中位以下は撫で調整する。

12・13・17は、高杯である。杯部の外面は密に笠磨き、内面には放射状の暗文が施される。また、脚部の外面は刷毛目の上に暗文状に横線の笠磨きを加え、内面には絞り痕、器部外面は密な笠磨き、内面には刷毛目がみられる。胎土は良質で、赤褐色を呈する。

14・15は、長颈壺である。外面は密に横笠磨きし、内面は刷毛目の上に放射状の暗文を加える。良質な胎土で、赤褐色を呈する。

16は、脚付きの鉢である。鉢部の外面は密な笠磨き、内面は丁寧な撫でもしくは笠磨きで平滑に整えられる。脚部は、内外面ともに刷毛目調整である。比較的良質な胎土で淡茶褐色。

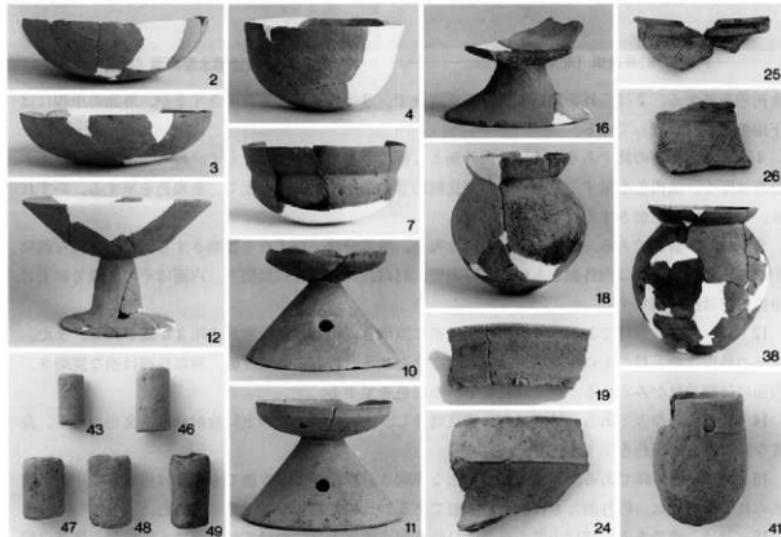
18～24は、壺である。18は小型の壺で、口縁部から体部上半にかけては横撫で、底部から体部中程にかけて縦方向の撫で調整、内面は縦の指削りに、底部付近では板の小口状工具による撫で上げを加

える。胎土は小砂粒を含み、淡褐色を呈する。19は、畿内系の二重口縁壺である。口縁部と頸部以下の破片は直接接合できないが、明らかに同一個体なので、実測図上で復元した。口縁の下端には、二個単位の円形浮文が貼り付けられる。浮文には、竹管による刺突が加えられている。頸部の付け根には、高い突帯が貼り付き、その頂部には笠による刻みがみられる。頸部から口縁部は横撫で調整、体部の外面は、刷毛目の上に継ぎ荒磨きを加え、内面は荒削りする。20は、口縁部の小片である。内外面とも、叩き調整する。21は、短頸壺である。撫で調整で整えるが、体部内面は細かい単位の荒削りを行う。胎土には、若干の角尖石が混じる。22は、締まった頸部から外反して大きく開く口縁部を持つ。頸部から口縁部は横撫で、体部外面は刷毛目、内面は荒削りする。23は二重口縁の破片である。器表は摩滅し、調整痕跡は残っていない。黄茶色を呈する。24は、袋状口縁の破片である。口縁は横撫で、頸部外面は刷毛目、内面は密に荒磨き、体部は撫で調整する。前代の遺物が混入したものであろう。

25~38は、甕である。25・26は、東海系S字状口縁台付き甕の破片である。短く屈曲した口縁部を持つが、口縁部に刺突文や押引文は見られない。頸部の内面には、横位の櫛目がみられる。27・28は、吉備系土器の甕である。口縁直下の外面には、煤が付着している。頸部から口縁部は横撫でで体部内面は荒削りする。胎土には、角尖石を含む。29は、庄内式系の甕である。体部外面は右下がりの平行叩き、内面は荒削りする。30~38は、布留式系の甕である。31の肩部には3条の櫛描波状文が、35・36には4条の櫛描沈線文が刻まれる。

39~42は、土師器の螭壺である。39・41には、穿孔の向かって右から背面にかけて、櫛描平行沈線が、弧を描いて刻まれる。43~49は、土鍾である。すべて、円筒形に作られる。

古墳時代前期の構造遺構である。



Ph.11 63号遺構出土遺物

■東海系S字状口縁台付甕については、(財)愛知県埋蔵文化財センター赤堀次郎氏の御教示を頂いた。

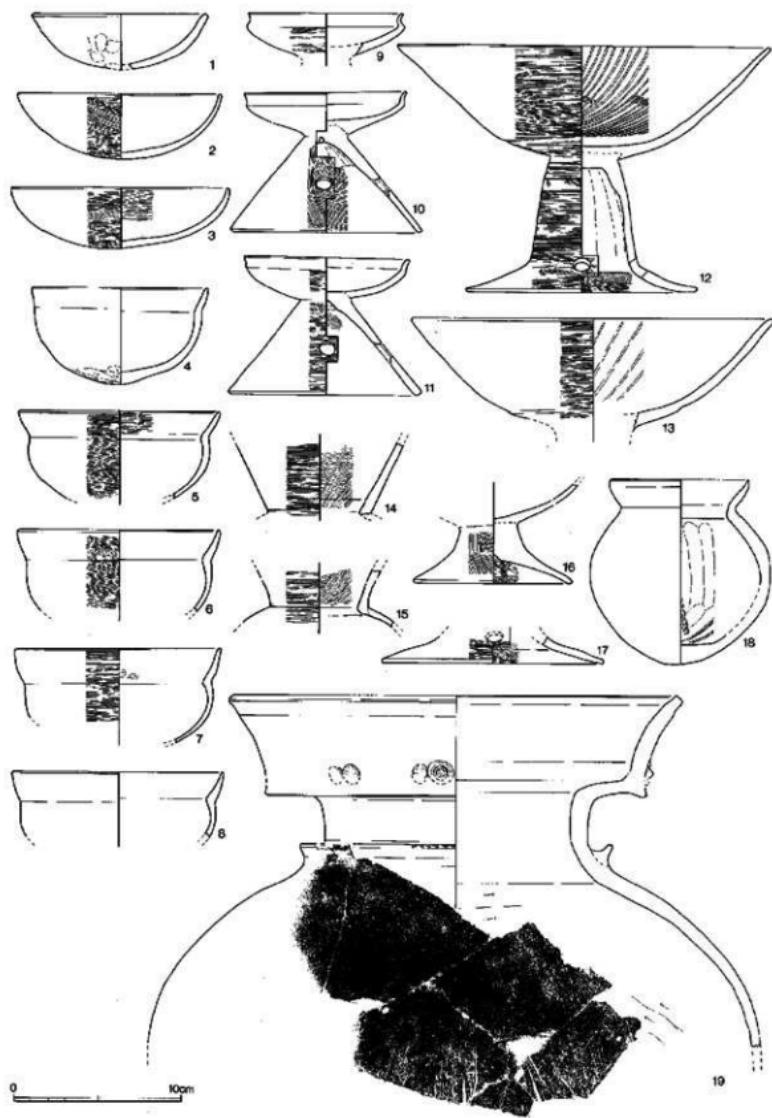


Fig.13 63号造構出土遺物実測図 1 (1/3)

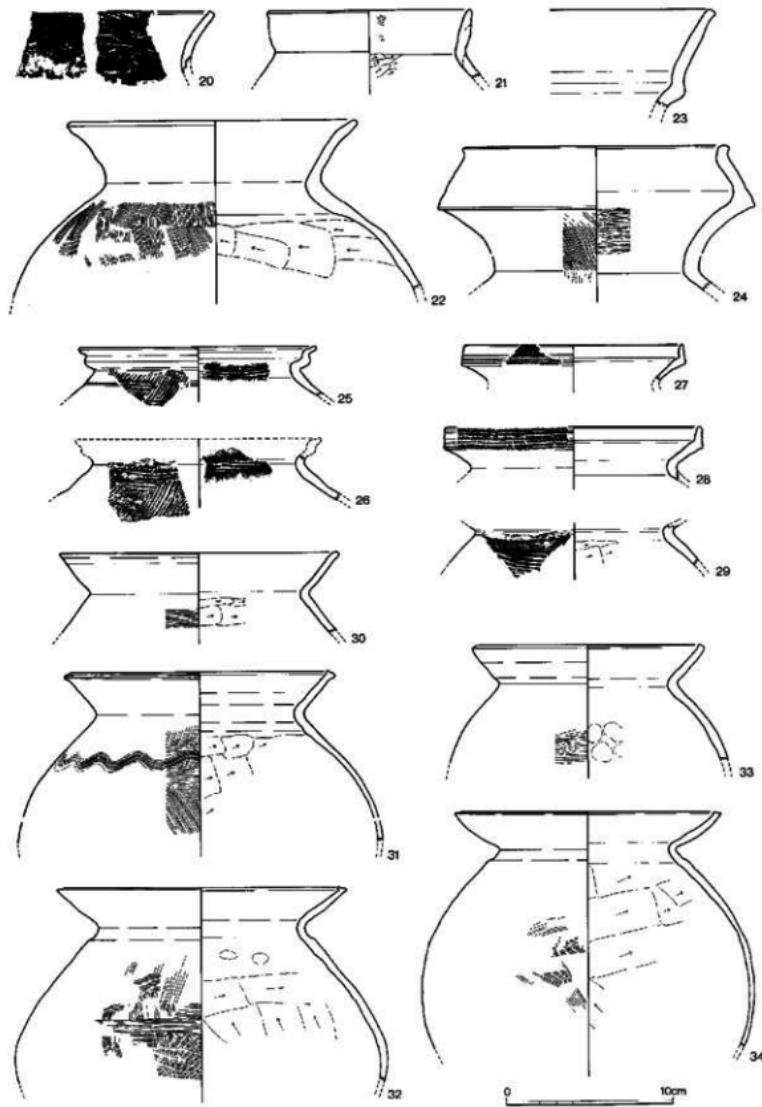


Fig.14 63号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

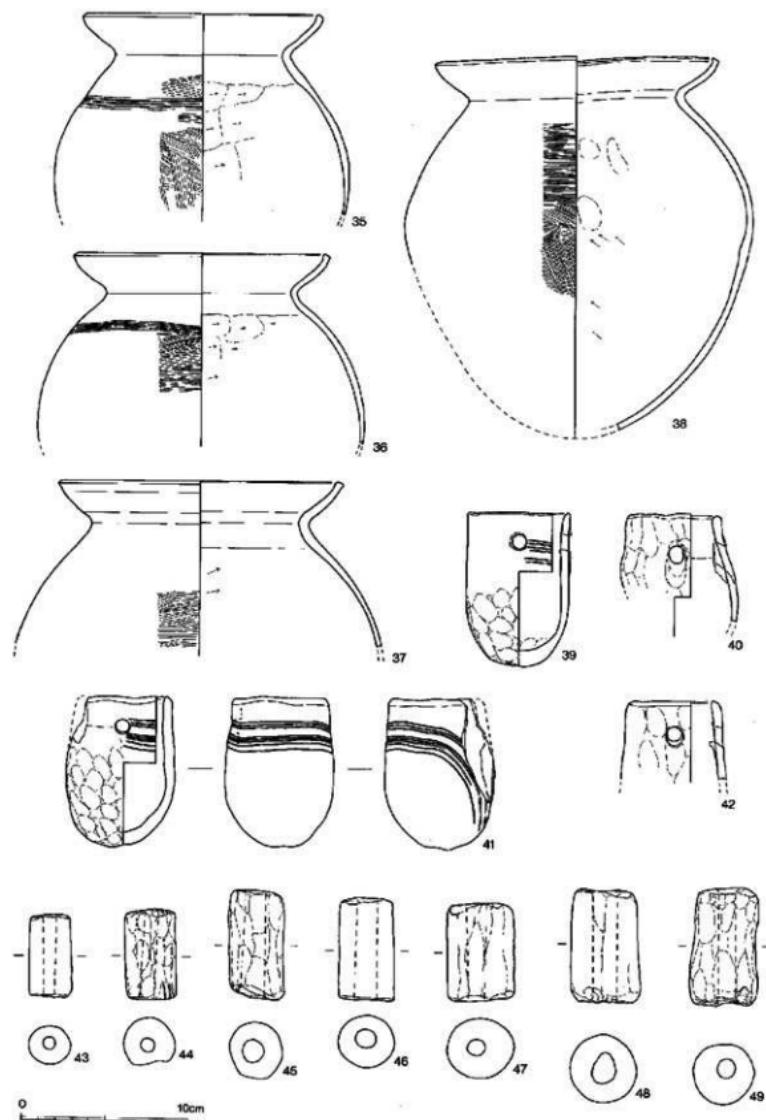


Fig.15 63号遗構出土遺物実測図 3 (1/3)

64号遺構

2区の東端から検出した溝状遺構である。Fig.12に示したように、63号遺構を切っており、63号遺構調査時に区分した63C・63Eは64号遺構に含まれる。また、同図の観察によれば、その東辺は別の遺構に切られているが、発掘調査時にはこれを掘り分けることはできなかった。

土層壁において、幅360センチ、深さ120センチをはかる。検出部分が短いので不確実だが、大体主軸をN-14°-Wにとる。古墳時代前期の溝状遺構である。

古式土器が出土した。Fig.17-1は、椀である。外面は密に範磨きされるが、單位は捉え難い。内面は荒れている。胎土は細かく、赤茶色を呈する。2は、小型の鉢である。外面は刷毛目の上に範磨き、内面は横撫である。胎土は精良で、赤褐色を呈する。3は、高環であろう。外面は横範磨き、内面は横撫での上に放射状の暗文を重ねる。胎土には微砂を含み、茶色を呈する。4は、二重口縁壺の口縁である。横撫で調整する。淡褐色を呈する。5は、短頸壺である。口縁部は横撫で、体部外面は刷毛目で、内面は範削りする。胎土には2ミリの大砂砾を含み、茶色を呈する。6は、庄内式系の甕である。口縁部は横撫で、体部内面は頸部いっぽりまで範削りする。7・8は、布留式系の甕である。口縁部は横撫で、体部外面は刷毛目で、内面は範削りする。9は甕であろう。横撫で、頸部内面に刷毛目が残る。10・11は、筒形の土錘である。10の両端部には、棒状工具による刻み目がみられる。12-16は、鉗壺である。

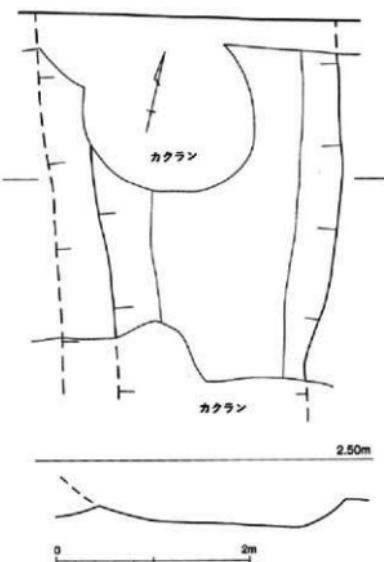


Fig.16 64号遺構実測図 (1/50)



Ph.12 64号遺構（南より）



Ph.13 64号遺構土層断面（南より）

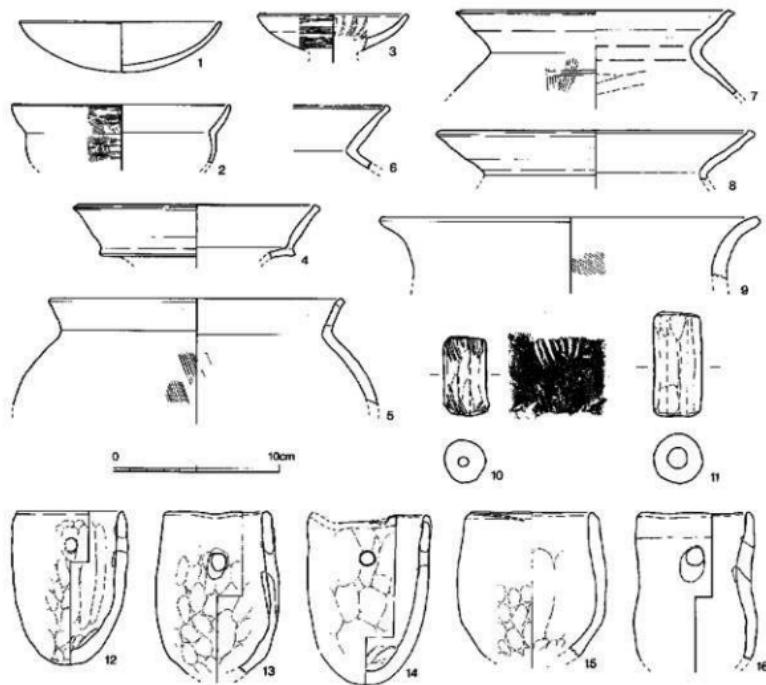


Fig.17 64号遺構出土遺物実測図 (1/3)

67号遺構

2区西側の、攪乱坑の下から検出した上坑である。遺存状態は悪く、形状・規模ともに不明である。古式土器器が出土した。Fig.18-1は、器台の脚部である。外面は密に窓磨き、内面は刷毛目で、擦撫部がある。2は底であろう。赤茶色を呈する。3は、布留式系の甕である。4は、鉢蓋である。

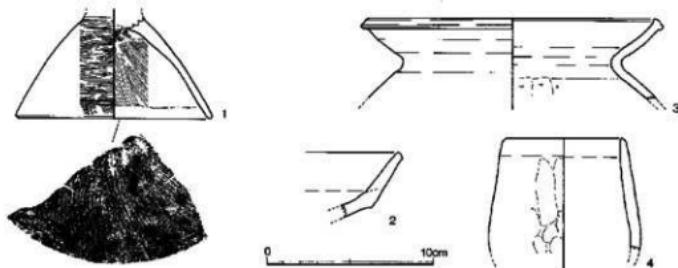


Fig.18 67号遺構出土遺物実測図 (1/3)

74号遺構

3区西側、Gr.1で検出した土坑である。直径150センチ前後、深さ55センチのすり鉢形を呈する。古式土器が出土しているが、図化できたものは少ない。Fig.21-1は、小型の鉢である。外面は密に範磨き、口縁部内面は横撫で、体部内面は平滑な撫で調整を施す。2は、二重口縁壺である。内外面とも横撫で、頸部下半は撫で調整する。淡赤茶色を呈する。3は、壺壺である。外面は指押さえ、内面は撫で調整する。穿孔のある部分は全体に器壁が厚くなっている。

古墳時代前期の土坑である。

76号遺構

3区のはば中央、Gr.3で検出した土坑である。径250~300センチの不整円形を呈し、検出面からの深さは38センチをはかる。

古式土器が出土した。Fig.21-4は、檐である。外面は密に範磨き、内面は平滑に撫である。5は、小型の鉢である。外面は範磨き、口縁部内面は横撫で、体部内面は平滑に撫で調整する。6は、壺壺である。内外面とも、撫で調整する。7は、筒形の土錐である。撫で調整で平滑に整えている。

古墳時代前期の土坑である。

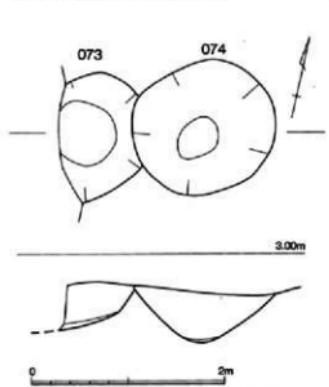


Fig.19 74号遺構実測図 (1/50)

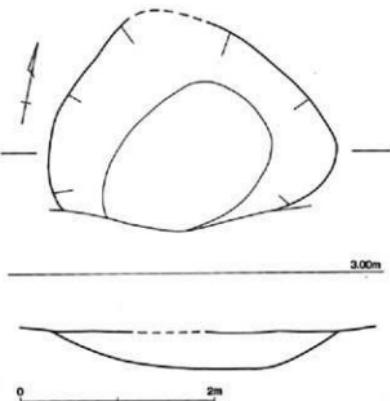


Fig.20 76号遺構実測図 (1/50)



Ph.14 74号遺構 (北東より)



Ph.15 76号遺構 (南西より)

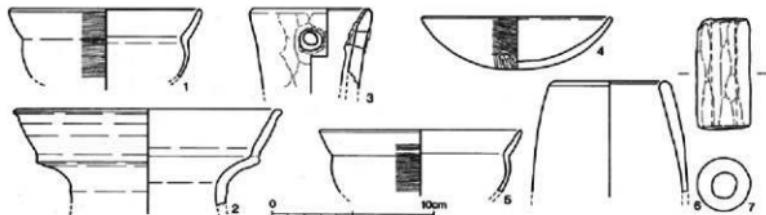


Fig.21 74号造構出土遺物実測図 (1/3)

78号造構

3区Gr.4から検出した土坑である。全体の三分の一程度を検出したにとどまる。径230~270センチの卵形と推定され、検出面からの深さは60センチをはかる。

古式土器の破片が、若干出土した。図化できたものを、Fig.25-1~3に示す。1・2は、甕である。口縁部を横撫で調整する。1は、体部内面を窓削りする。布留式系である。2は頸部以下を欠失するが、頸部は覗く屈折するよう、あるいは庄内式系の範疇に入るものであろうか。3は、筒形の土錘である。指撫で調整で滑らかに整える。胎土には、2ミリ以下の砂礫を含み、粗い。

古墳時代前期の土坑である。

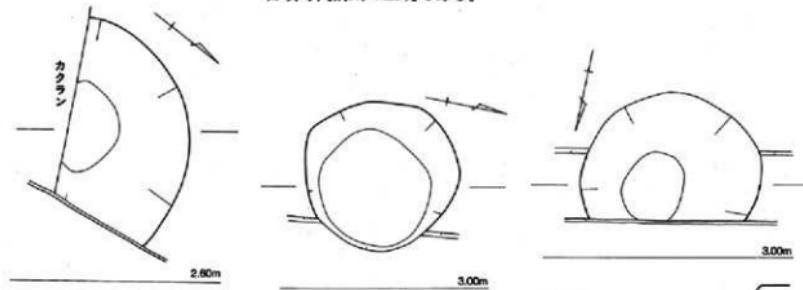


Fig.22 78号造構 (1/50)

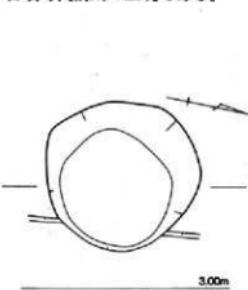


Fig.23 80号造構 (1/50)

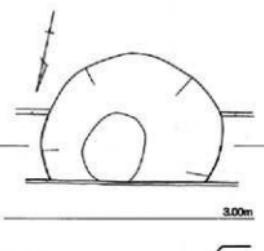


Fig.24 83号造構 (1/50)



Ph.16 78号造構 (南東より)



Ph.17 80号造構 (北東より)



Ph.18 83号造構 (北より)

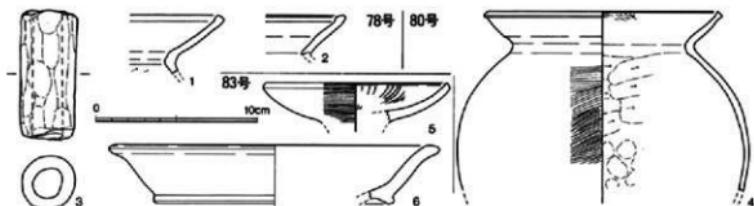


Fig.25 78号、80号、83号造構出土遺物実測図 (1/3)

80号造構

3区Gr.7から検出した土坑である。直径160センチ前後、深さ55センチ程の略円形を呈する。

古式土師器が、少量出土している。Fig.25-4に示した甕は、後述する3区Gr.5の土師器集中出土部分から出土した片断と接合することができた。口縁部は内外ともに横撫で調整であるが、内面の一部には薄く刷毛目痕跡が残っている。体部外面は刷毛目で、下半部は斜めに擦り上げる。体部内面は、上半では窓削り、下半は指押さえである。外面には、全面に煤が付着している。

古墳時代前期の土坑である。

83号造構

3区Gr.6から検出した土坑である。Tr.1の掘削によって、一部を掘り飛ばしている。直径190センチ前後の略円形と推定され、検出面からの深さは、83センチをはかる。

Fig.25-5は、高環の腹部分であろう。外面は密に磨き、内面は平滑な施での上に、放射状の暗文を加える。6は、二重口縁甕である。器表は荒れ、調整痕は残っていない。

古墳時代前期の土坑である。



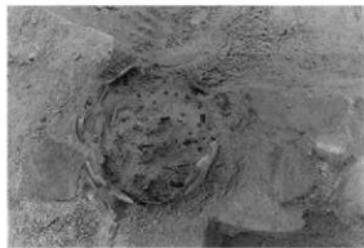
Ph.19 87号造構 (北より)



Ph.20 87号造構 (北西より)



Ph.21 87号造構土器・玉出土状況 (北より)



Ph.22 87号造構内玉出土状況 (南より)

87号遺構

3区の調査をあらかじめ終了し、Gr.4とGr.5との間に残ったベルト部分を取り外した際に検出した遺構である。標高2.64メートル前後で、幅50センチ、長さ100センチ程の範囲に滑石製の玉類、土師器などが散らばって出土した。ベルト部分の断面を精査したが、掘り方は確認できなかった。

遺物の分布状況は西から、剣形石製品・土師器罐壺・土師器小梨丸底壺・土師器高壺・土師器壺と

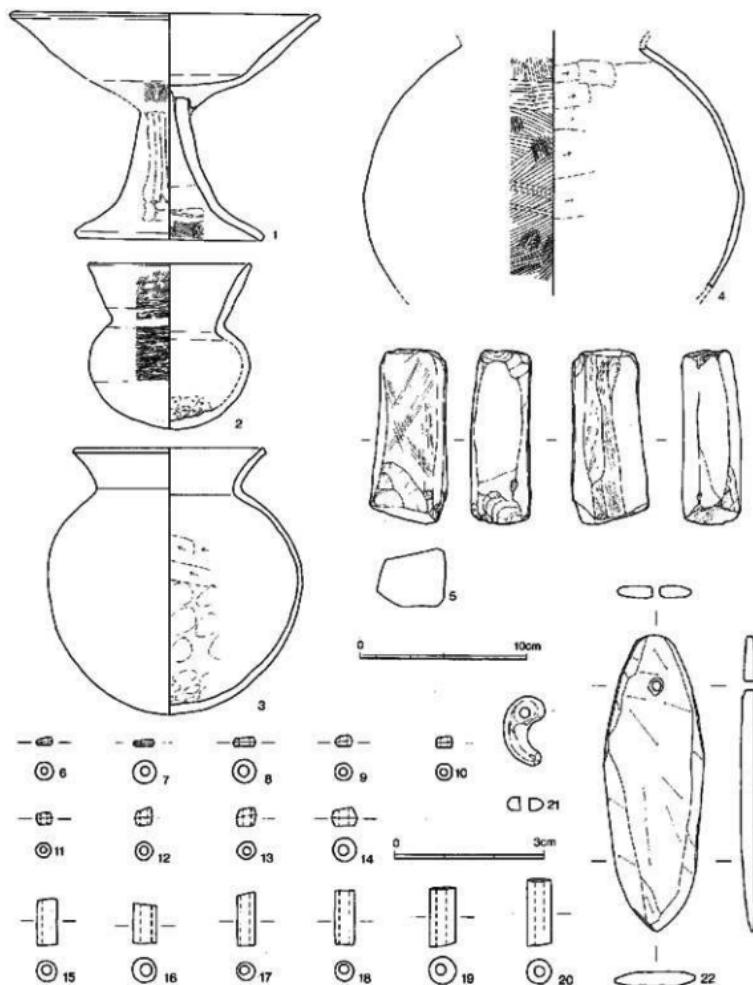
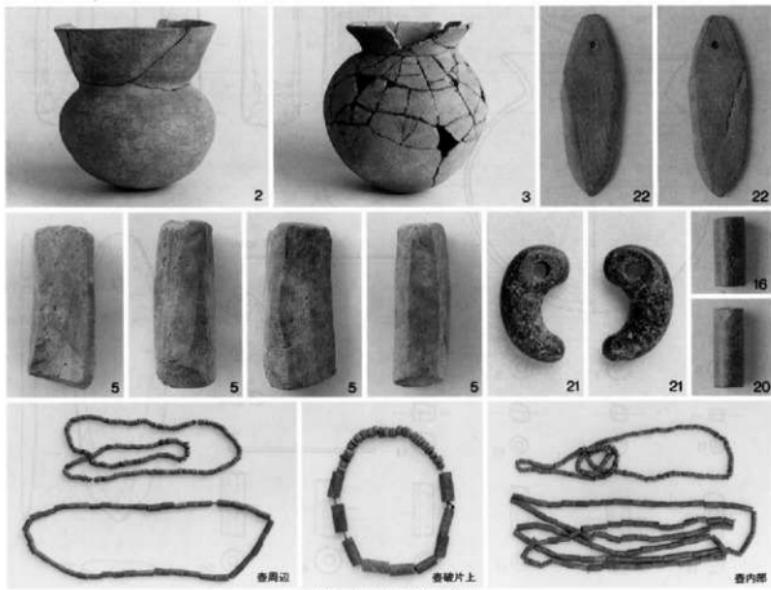


Fig.26 87号遺構出土遺物実測図 (1/3, 1/1)

直線的に並び、玉類は土師器壺の内側からその東側にかけて多く散らばっていた。玉について詳細にこれを見ると、土師器壺の中から出土したもの(管玉109個、白玉234個)、土師器壺の上にかぶさっていた壺の胴部破片の上から出土したもの(管玉9個、白玉24個、勾玉1個)、これら土器類の外側から出土したもの(管玉44個、白玉214個)に分かれる(合計、剣形石製品1個、勾玉1個、管玉162個、白玉472個)。ただし、玉類には、出土場所による相違点はまったくない。土師器を入れた壺は、口縁を北に向けほぼ横転していた。玉は壺の内壁から、壺内を満たした砂にまんべんなく混じり、さらに壺の上に乗っていた別の土師器壺の破片の上から周辺部にまで広がる。壺の内壁に接していた管玉は、一部でS字状の配置を示しており、綴られた状態をとどめている。一方、剣形石製品は、管玉・白玉とは離れて、単独で最も東側から出土しており、これら玉類とは全く別個に扱われていたことがわかる。これら玉類と土師器の出土状況については、「第三章 まとめ」で検討する。

Fig.28-1~4には、土師器の内主要なものを図示した。1は、玉類を納めた壺のすぐ東に接して倒れていた高壺である。壺部の外面は横撫で、内面は器壁が荒れていて調整痕が残っていない。壺の下部は、刷毛目調整する。脚部外面は板撫による面取り、内面は撫でて、瓶部の外面は撫で、内面は刷毛目で、脚部と瓶部の転換点付近は横方向に細く指削りする。小砂粒混じりの胎土で、濃茶色を呈する。2は、高壺の東から出土した小型丸底壺である。口縁部の外面は縱刷毛目→横撫で→範磨きで、内面は横撫である。体部外面は、上半は密に範磨き、下半は撫で調整する。体部内面は指撫でで、底部は左まわりに指押さえで押さえ撫である。胎土は良好で、茶色を呈する。3は、玉類を納めていた壺である。口縁部は内外とも横撫で、体部外面は平滑な撫で調整する。体部内面は、頸部付近では縱方



Ph.23 87号遺構出土遺物

向の撫で上げ、肩部は指削り、下半部は指押さえをした後撫で調整を加える。胎土は微砂混じりで、赤茶色を呈する。4は、3の壺にかぶさるように出土した壺破片である。外面は刷毛目で、肩部の最も膨らんだ部分と下位部分に、縦方向の擦過調整を加える。内面は、笠削りする。胎土には、1ミリ以下の砂粒を含み、赤茶色を呈する。

5は、磁石である。完形品で、小口を除く各面を砥石として使用している。石材は、肌理の細かい凝灰岩で、淡橙色を呈する。仕上げ砥であろう。

6～14には、滑石製の白玉を示した。厚さ0.8ミリほどしかない薄っぺらなものから、3.9ミリの長めのものまで幅があり、直径も2.9～4.9ミリと様々である。これは管玉についても同様で(15～20)、直径3.5～5.4ミリ、長さ7.5～18.3ミリとばらつきがある。21は、滑石製の勾玉である。極めて滑らかに、丸みが強く整えられている。黒灰色で、光沢を持つ。22は、剣形石製品である。箇は立たず、両側縁だけを斜めに削って、刃部を作り出している。凝灰岩製で、淡灰緑色を呈する。

古墳時代前期の祭祀遺構であろう。

包含層出土遺物

遺構出土遺物以外に、撫乱と包含層からも多量の遺物が出土している。撫乱からは主として近・現代の陶器類が出土した。生活に密着したものが多く、練り歯磨きの磁器製の容器など興味深いものも出土した。以下、包含層出土遺物の中から、目についたものを選んで報告する。

Fig.27-1・2は、3区Gr.5の東辺中程の砂層中からまとめて出土した古式土師器の一部である。特に掘り方は伴わず、遺構として捉えきれなかった。ともに布留式系の甕である。1は、ほぼ完形に復元できたもので、器高13.5センチの小型甕である。口縁部から頸部は横撫で、体部外面は刷毛目、体部内面は上半で笠削り、下半は撫でで、内底部は指押さえする。胎土には、1ミリ大の砂粒を多く含むとともに、細かい角閃石も混じっている。淡褐色を呈する。2は、口縁部横撫で、体部外面刷毛目、内面笠削りである。胎土には小砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。このほか、Fig.25-4の甕の一部も一緒に出土している。

3～6は、いずれも3区包含層出土の古式土師器である。3は、高坏である。完形品で、若干歪んでいる。坏部外面は横撫で、内面は立ち上がりの上半で横撫で、下半で刷毛目、内底部で撫で調整する。脚部外面は撫で、筒部の内面は笠削り、裾部は横撫である。3ミリ以下の大小の石英粒・長石粒を含み、明茶褐色を呈する。4は、ほぼ完形の甕である。外面は疎らな笠磨き、内面はこてを当てて平滑にした後放射状の暗文を加える。胎土は、若干の微砂を含むもののおおむね良好で、茶色を呈する。5は、甕である。口縁端部を外方に摘み出し、やや垂下させる。口縁部は横撫で、体部外面は細かい刷毛目、内面は笠削りする。小石英粒を含んだ胎土で、淡褐色を呈する。搬入系の土器か。6は、畿内系の大型壺であろう。頸部付近では撫で、肩部では刷毛目を地文とした上に、櫛状工具による平行沈線と波状文を描く。さらに、頸部の平行沈線上には、竹管による刺突文を加えている。内面は、頸部では指押さえ、肩部では指削りする。胎土は、径0.



Ph.24 3区Gr.5包含層土師器出土状況（北より）

5ミリ以下の小砂粒を多く含み、淡灰茶色～肌色を呈する。

この他、2区と3区の包含層を中心に多量の古式土師器・鋗壺・土錐が出土しているが、その様相はこれまで述べてきた出土遺物と基本的に異なるところはない。

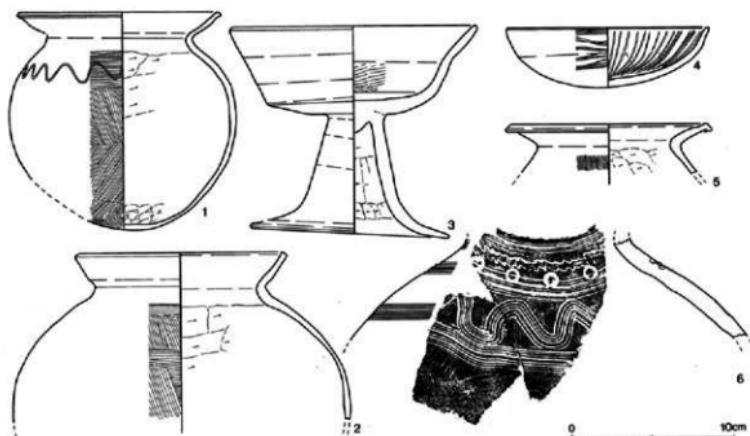
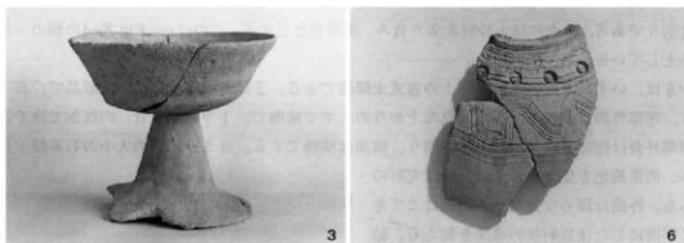


Fig.27 包含層出土遺物実測図 (1/3)



Ph.25 包含層出土遺物

第三章 まとめ

この簡略な報告を終えるにあたり、若干のまとめを試みたい。

堅粕道路第8次調査は、第3次調査地点・第7次調査地点に近接し、調査着手以前より古墳時代前期の造構・遺物の出土が予想された地点であった。今回の発掘調査は、これにそった結果を出したものと言える。しかし、既存建物の基礎等による搅乱が著しく、造構の遺存状態はかなり悪かった。すなわち、搅乱坑の隙間に造構が残っていると言う状況であった。さらに、2区・3区においては、地山砂層を覆う黄褐色砂と造構埋土との識別が困難で、3区においてはトレンチで造構の有無を確認した後、検出可能な高さまでグリッドを設定して振り下げ、造構のプランを確定して調査するという方

法を取った。そのため、本来の遺構検出面が不確かになると言う弊害を招いてしまった。これらの悪条件によって、遺構の総合的な検討が、ほとんど不可能であった。

そこで、周辺の過去の調査例を参考にすると、第8次調査地点の北に隣接する第7次調査地点では、竪穴住居跡などが調査され、集落の一端と考えられた。一方、南側に道路を隔てた向かい側にあたる第3次調査地点からは、当該期の方形周溝墓が検出されている。本調査検出2区の63号遺構や64号遺構などの大型の溝状遺構は、あるいは方形周溝墓と関連づけることが可能かも知れない。1区検出の21号遺構(溝)は、規模的には方形周溝墓とも集落に関わる溝とも考えることができる。各区から検出した土坑は、やはり集落生活に引きつけて考えたい遺構である。出土遺物にも蠍毒や土鍬など漁撈活動を示唆するものが多く、漁撈を主とした集落の外縁近くを調査したものと理解したい。

3区87号遺構は、大量の玉類が占式土師器とともに出土した特異な遺構であった。その出土状況から、若干の検討を加える。まず、掘り方を伴わないことに注意しなければならない。さらに、玉類の分布は土師器壺に集中し、壺の周囲から遠ざかるにつれて散漫に散らばっている。壺付近における玉類の出土状況は、壺の底に密着したものがある一方で、壺内に充満した砂中にも万遍なくしかも高密度で混じっており、さらに壺にかぶさるように出土した土師器片の上にも散らばっていた。これらの状況は、玉類が、壺内に納められていたものではなかったことを示している。また、壺底に密着していた管玉の状況から、これが本來は緩されていたことが知られる。以上の状況にかなり大胆な憶測を交え、次のような状況を推定したい。おそらく、玉類は地面に刺し立てた櫛に懸けられていたものであろう。櫛のもとには土師器の壺が置かれ、さらにその横に高杯・小型丸底壺が並べられていた。櫛から垂れた玉の一端は、壺の底にとどいていた。やがて、大風か何かで、壺や高杯は倒れ、玉を緩った紐も切れ、玉は周囲の砂とともに壺の中に流れ込み、散らばり、土師器もろとも砂中に埋没したのだろう。ところで、分布状況を見ると、劍形石製品だけが、他の玉類から離れて、一連の遺物の最も東端から出土している。あるいは玉類を中心とした遺物群とは別になる可能性もあるが、出土したレベルが同じであり、あえて切り放して考える必要もないものと思われる。87号遺構の範囲に含めることとした。このように推測できる87号遺構は、言うまでもなく祭祀遺構である。上述した調査地点の位置関係を考え併せて、集落と墓域との境界付近における祭祀行為とみたい。

堅柏遺跡群第8次調査は、必ずしも充実した成果を上げた調査とは言い難い。しかし、古墳時代前期における方形周溝墓と漁撈集落という景観が推測される本調査地点付近での発掘調査的重要性は軽視して良いものではない。今回の調査では、両者を精神的(信仰的?)に区画したと思われる祭祀遺構を検出することができた。今後の周辺の調査によって、より可視的に古墳時代前期の生活空間の復元ができる信じ、また期待したい。

参考文献 玉城一枝「土器にいたる玉」同志社大学考古学シリーズ4『考古学と信仰』1994年

堅粕 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第590集

1999年(平成11年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 今井印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1丁目2番18号

